土史を発刊

村郷土史編纂事業が集大成となる「普代村郷土史」（A5判・千百六十ページ）は、昭和五十九年一月に発刊された「普代村史」の疑問点などを解明、流れをスムーズにし、村郷土史編纂委員会（大森竹之助委員長、熊谷文弥委員、岩城泰道委員）の皆さんの努力により発刊されました。委員会はこれまでに当時の政治、経済、産業など、現在とはまったく異なる厳しい自然条件の中で、それを克服、生きる方向を模索し続けた先人の命の叫びがつづられた「普代村の古文書（Ⅱ）、（Ⅲ）」、「普代村史細見」、たたら製鉄について解明した「『たたら』ってなに」、「郷土を探る」、普代村郷土史の資料編として文治五（一一八九）年から明治二（一八六九）年までの村内を始め、県内外から村に関係するものを集め収録した「普代村郷土史資料編」、種市町出身の高名な俳人、下町渓月（本名下町七之藏・故人）が村を訪れ、数々の名吟（優れた詩歌）と俳画をつづった紀行文「俳人下町渓月と普代村」、を発刊してきました。その総集編ともいうべき「普代村郷土史」の出版を記念し今回、大森委員長から特別寄稿をいただきましたので紀行します。

特別寄稿

村郷土史編纂委員長
大森 竹之助さん（71歳・久慈市在住）

普代村郷土史発刊に寄せて

このたび普代村郷土史が発刊されましたことは、望外の喜びであり安堵の気持ちでいっぱいであります。さて顧みますと普代村郷土史副本として普代村古文書集Ⅱ～Ⅲ、普代村史細見、郷土を探る、「たたら」ってなに、普代村紀行文、普代村郷土史資料編を発刊し、今回の発刊はこの総集編というべきものであります。

人の生活は未来永劫に続き、歴史は刻々と刻まれるので、郷土史発刊は終わっても、歴史は終わりではありません。要するに現時点での到達点・出発点といえましょう。この経緯のとおり編纂委員会は常に全力を傾注してきました。編纂業務については始終村当局の親切なご指導とご配慮、さらに幸いにも村内外の関係各位のご協力があって、全力投球ができたのであって、心から感謝申し上げます。

普代村郷土史の発行は、どのような意味があるのでしょうか。

普代村史では時代区分が不明瞭ではないのか、奈良・平安時代は古代であり、鎌倉時代から中世というのが普通である、そうなれば宇漢米公隠賀は当然古代の人間であって、中世に入れているのはすっきりしない。また熊谷文弥編纂委員がご指摘の「普代難破船と『オーライド』」は、青森県の大間の田名部での事件で、普代村とはまったく関係のない事項であります。

このほか疑問は枚挙に暇がありません。そこで時代の流れを整理するとともに、資料を収集しこれを根拠として疑問点を明らかにしました。また現在の普代村の基は化政時代だとする考えがありますが、とすれば幕末に普代村が成り立ったことになりますが、普代村は中世後期・藩政初期にはその名がありますので、大きな誤りでありましょう。

このように疑問点を解明し流れをスムーズにしました。

民俗もとりあげましたが、歴史との区分で曖昧なところがあります、いつか明確に整理する必要があります。

編纂委員各位には多忙な仕事を持ちながら、遠方からと大変なご苦労をおかけしましたことをおわびし、今後とも何かとご指導賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、村民の皆さまには他に誇れる村の優れた自然・歴史・文化を郷土史からお汲みとり願い、今後に大いに生かしていただければ幸いに思います。